



「Sulang」はパラオ語で「ありがとう」という意味です。（私が置かせていただいている環境に感謝を込めて）

2025 年 12 月、私は日本から離れたパラオにいますが、日本では映画「ペリリュー～楽園のゲルニカ～」が公開されます。恥ずかしながら私自身、青年海外協力隊としてパラオに来るまで日本とパラオの関係について全く知りませんでした。パラオと日本には深いつながりがあります。パラオには昔の日本を感じさせる物や文化が残っていて、たくさんのことを学ぶことができ、たくさんのことを考えることができます。今回は映画公開のタイミングでパラオにいるという深い縁を感じつつ、ペリリュー島のことについて紹介します。



○日本と大洋州の島々

日本は第一次世界大戦後の 1920 年頃に南洋諸島（現在のパラオ・ミクロネシア・マーシャル・北マリアナ）を国際連盟の委任統治領として支配し、太平洋戦争前から戦時中にかけて軍事拠点や資源の獲得などを目的として移民政策を進めました。日本型教育も導入され、インフラ整備も進んで、今もなお日本文化が残る島々があります。太平洋戦争ではこれらの島々が激戦地となり、現地社会に大きな影響を残しました。その一つがパラオです。



○ペリリュー島

ペリリュー島は私が住んでいるバベルダオブ島から南西にある島です。1920 年頃、日本政府はパラオに南洋庁を置いて、当時南洋地域の拠点としていました。太平洋戦争中には日本軍はパラオのペリリュー島に飛行場を作っていました。今も飛行場は残っています。ペリリュー島では日本軍とアメリカ軍の激しい戦闘が繰り広げられました。戦争において飛行場はとても重要なわけです。当時、日本軍とアメリカ軍には圧倒的な戦力差があり、1 カ月余りで 1 万人の犠牲者を出して日本軍は破れました。

「ペリリュー～楽園のゲルニカ～」はペリリュー島の戦いを描き、終戦後約 2 年間、身をひそめながら生き抜いた日本軍の生き残り 34 名についての物語で、漫画が映画化されました。

私もペリリュー島に足を運ぶことができ、今も残る当時の防空壕や生活跡、戦車や建物を見ることができました。見るのは辛かったですが、自国のために犠牲になった方々を慰霊しつつ、平和な時代に生まれたことに感謝しました。そして、今もなお起こる国同士の争いについてどう向き合うべきなのか思いを巡らせました。よろしければ「ペリリュー」をご覧ください。

